

1 実践概要

本校の生徒は、素直で明るく、奉仕的な作業に意欲的に取り組み、人の役に立つ人間になりたいと考える生徒が多い。学習については、授業に真面目に取り組み、考えを共有する場面では積極的に自分の考えを伝え合うことができる生徒が多い。また、授業でタブレットを活用する頻度が増加し、適切に操作したり上手に使いこなせたりする生徒が増えている。その一方で、「活字を読む」「物事をじっくり考える」「身に付くまで何度も繰り返す」など粘り強く取り組む学習を苦手とする生徒が多い。通常学級の中に学習に困り感を抱いている生徒も多く、授業に参加することや学習内容を理解することが難しい生徒が一定数存在している。これらの課題を改善するため、本校では、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた教育活動を展開し、学びやすさや分かりやすさを追究した授業のあり方について研究を進めてきた。年3回の協働による研究授業では、生徒の実態把握や配慮が必要な生徒への支援、ユニバーサルデザインの視点について共有し、授業検討会では、小学校、中学校、高等学校、専門家の先生方を交えて、ユニバーサルデザインの視点が生徒の学びに有効であったかどうかについて意見を出し合った。

◆キーワード◆ 分かる授業、授業UD、協働による授業づくり

2 令和3年度の取組の概要

主な取組	(1) 専門家（東北福祉大学准教授 黄 淵熙先生）による研修会の実施 7月 講話「ユニバーサルデザインの考えを踏まえた授業づくり」 11月 講話「ユニバーサルデザインにおける生徒の多様性」 (2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた研究授業と授業検討会 10月 理科（1年）・数学（2年）・社会（3年） 11月 音楽（1年）・英語（2年）・理科（2年）・数学（1年）・保健体育（3年）
成果	(1)について 「授業UD」「UDL」「合理的配慮」等の理解や通常学級の中でのUDLのイメージや生徒の多様性について研修を深めることができた。授業づくりを行う上で新たな気付きを見い出すことができた。 (2)について UDを取り入れた授業は、生徒の学びやすさや学習意欲を高めることに有効であることが分かった。どの教員も普段の授業の中にUDの視点を意図的に取り入れて行うようになった。
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニバーサルデザインの視点や手法についての理解 ・学習に困り感を抱いている生徒への個別支援の在り方

3 令和4年度の実践の概要

<p>主な取組</p>	<p>(1) 年3回の協働による研究授業と授業検討会 9月 1日 (木) 社会 (1年) 9月27日 (火) 保健体育 (1年) 11月22日 (火) 数学 (2年)</p>
<p>成果</p>	<p>(1)について 事前に全教員が生徒役になり模擬授業を行った。事後検討会では、3グループに分かれ、授業に取り入れたUDの視点の有効性などについて話し合った。教科の枠を超えて、UDの視点という共通のテーマについて意見を交わし合う、とても有意義な時間となった。研究授業後の授業検討会では、小学校、中学校、高等学校、専門家の先生方を交えて、小グループで意見を出し合った。模擬授業で改善したことが、実際の授業で効果的に働いていたのか、主体的な学びにどのように生かされたのかについて検証した。UDの視点が、生徒の学びに有効であるのと同時に、各教科の教員同士で「よい学び」について話し合う際の「共通の視点」の要素となっていた。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現にもUDの考えが有効であると実感できた。</p>
<p>課題点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業以外の取り組みである個に応じた家庭学習の工夫について ・ 学習に困り感を抱いている生徒への個別支援の在り方 ・ 生徒の多様性に配慮した具体的なUDLの手法について

4 令和5年度の実践（まとめ）

<p>指導目標</p>	<p>(1)各教科の授業実践にUDの方法を取り入れ、特別な配慮を要する生徒も含めて全ての生徒が主体的に学ぶことができるような授業のあり方を探る。 (2)模擬授業や検討会を通して、教科の壁を越えて、UDLを取り入れた授業づくりを研究することにより、教員の授業力向上や生徒の学習意欲の向上を図る。</p>
<p>指導目標に対する主な手立て</p>	<p>【視点1】UDを授業の中に取り入れ、生徒が主体的に取り組むための授業の工夫 ・「焦点化」（目標や学習活動を明確に絞り込む）、「視覚化」（説明や指示などを板書や絵、写真、映像などによって視覚的に示す）、「共有化」（話し合う・伝え合う・協力し合う場面の設定）などの視点を授業に取り入れる。 【視点2】学習に困り感を感じている生徒への個別支援（学びやすさのデザイン） ・配慮を要する生徒の実態を把握し、学習に対する困り感に対してどのような支援をすればよいか手立てを考える。</p>

<p>経過</p>	<p>(1) 7月18日(火) 第1回研究授業及び授業検討会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生の理科(題材: 遺伝の規則性と遺伝子)の研究授業を行った。 ・授業検討会では、「ICTを活用した共有化」「発声と動作化による身体の活用」「3種類のヒントシートを活用した個別支援」などの有効性について、学年ごとに3グループに分かれて検討した。専門家の先生方から、言語的な説明の必要性やUDの成果を生徒と共に振り返ることの大切さ、また安心を提供することが主体的な学びにつながることなどについて指導があった。 <p>(2) 8月31日(木) 第2回研究授業及び授業検討会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生の国語(題材名: オオカミを見る目)の研究授業を行った。 ・授業検討会では、「学習活動を短く区切り、生徒の学習意欲を持続させる工夫」「学習の流れを提示して、学習活動の見通しを持たせる工夫」「グループ活動の場を設定することで、他者の考えを聴き合い、自分の考えの手助けとする工夫」などの有効性について、学年ごとに3グループに分かれて検討した。専門家の先生方から、「分かりやすく」という言葉の意味を生徒がイメージできるように、より具体的に説明することの大切さやUDLと合理的配慮を区別した授業づくりなどについて指導があった。 <p>(3) 11月18日(火) 第3回研究授業及び授業検討会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生の数学(題材名: 平面図形の見方を広げよう)の研究授業を行った。 ・授業検討会では、2通りの方法を用意し、個に応じて課題解決の方法を選択できるようにした点、正六角形の中に模様を作る際、教師がモデルとして手順を示した点などの有効性について、3グループに分かれて検討した。専門家の先生方から、概念を説明することの大切さ、安心して自己理解できるような支援の必要性、様々な選択肢を準備しておくことなどについて指導があった。
<p>成果</p>	<p>学校全体でUDに関する理解が深まった。多様な生徒が存在することを改めて認識し、すべての生徒にとって「分かる・できる」授業づくりをするために、一人一人の特性を把握し教員間で共有し合える環境ができた。また、どの教員もUDの視点を取り入れることが習慣となり、教員の授業力の向上や生徒の学習意欲の向上、主体的・対話的な学びに生かされている。その結果、校内の学習アンケートでは、「授業内容は理解できていますか」「授業が楽しい、おもしろいと思うことがありますか」の質問に対して、現3年生の9割以上の生徒が肯定的な回答をしている。</p>
<p>課題点</p>	<p>通常学級の中に困り感を抱いている生徒が多く、発達障害や特別支援教育への理解や知識を深めたり、具体的な支援の在り方について学んだりする研修の機会を整備していく必要がある。</p>

5 北角田中学校におけるユニバーサルデザインの授業づくりの実践事例

(1) 協働による授業づくり

授業者と教科担当者、教科の枠を超えた教員同士でチームを編成し、それぞれの教科・教員の立場から意見を出し合い、協力して授業づくりを行った。

○模擬授業と事後検討会

教科担当者と空き時間の教員（5～6名）が生徒役となり模擬授業を行った。事後検討会後は、「学びやすさ」や「分かりやすさ」などの視点から、教員の指示や発問について検討した。

○研究授業と授業検討会

年3回の研究授業のうち1回目と2回目については学年ごと、3回目は学年によらないメンバーでグループを編成し、様々な立場から、授業に取り入れたUDの視点の有効性について意見を出し合った。

(2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり

本校では、以下から2～3つの視点を取り入れた授業づくりを行った。

<参加>

- 1 時間の構造化（活動の順番や所要時間、終了時刻の事前提示）
- 2 場の構造化（整理整頓、活動や動線を考慮した教材の配置）
- 3 刺激量の調整（光や音、学習のねらいや活動に応じた教材の提示）
- 4 ルールの明確化（発言や聞く態度、ノートの書き方等のルールの明確化と共有化）
- 5 クラス内の理解促進（間違いや分からないことを受容し、互いを認め合う関係づくり）

<理解>

- 1 焦点化（学習のねらいや活動を絞り込む）
- 2 展開の構造化（授業のスタイルのパターン化）
- 3 スモールステップ化（課題の難易度の調整（子どもの実態に応じて活用））
- 4 視覚化（授業における情報を見えるようにする）
- 5 身体の利用（動作化・作業化）（話す、書く、操作する、作る等の活動をバランスよく設定）
- 6 共有化（話し合う、伝え合う、協力し合う場面の設定）

※特に効果があった視点

【焦点化】

- ・目標や学習活動を明確に絞り込む。

【視覚化】

- ・説明や指示などを板書や絵、写真、映像などによって視覚的に示す。
- ・作業の手順をイメージしやすいように教師がモデルとなり示す。

【共有化】

- ・ペアやグループで話し合う場を設定し、他者の考えを聴き合い、考えの手助けとしたり、自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。

【その他（個別最適な学び）】

- ・個に応じて課題解決の方法を選択できるようにヒントカードやプリント等を数種類準備する。

6 「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

(1) ユニバーサルデザインによる授業づくり

- ・ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりについて

ユニバーサルデザインは、本校の教員で授業づくりをする上でのキーワードになっている。学習意欲や学習理解の向上、主体的な学びに効果があった方法などについて、教科の枠を超えて情報交換する機会が増えた。

- ・児童生徒の変容について

ユニバーサルデザインによる授業づくりを意識したことで、生徒の授業の理解度が高まり、基礎・基本の定着につながった。また、学び合いができる雰囲気づくりを進めたことで、単に教え合いに終わることなく、理由や根拠を入れて説明できる生徒が増えた。

(2) 小学校、中学校、高等学校、教育委員会の連携体制構築

- ・特別支援教育を推進する校内体制について

通常学級の中に発達障害と思われる生徒もおり、どの生徒にも分かる授業づくりをする上では、生徒の実態把握とともに特別支援教育への理解や知識を深めていく必要がある。特別支援コーディネーターをどのように生かしていくかについても検討する必要がある。(学習の場、生徒指導の場)

- ・異校種間の交流について

小学校、中学校、高等学校の先生方を交えた授業検討会では、様々な立場から意見が出され、参加者全員がユニバーサルデザインについての考えを深めることができた。その一方で、「連携」を進める上では、異校種間での足並みを揃えることの難しさを感じた。授業事前検討会の段階から小学校の先生方にも参加していただくと小学校の学びが中学校の授業づくりに生かされるのではないかと考える。

(3) 研修会やケース会による児童生徒理解

- ・外部専門家による知見の生かし方について

授業検討会後に3人の専門家の先生方から指導・講評をいただいた。安心を提供することが主体的な学びにつながることや学びのユニバーサルデザインを進めていく上での大切な視点について指導があり、ユニバーサルデザインの考え方について理解を深めることができた。

<総評>

生徒間の学力の差が大きくなる中学校においてUDLの実践は容易ではないと思っておりましたが、北角田中の実践を通じてその可能性を確信できました。北角田中の実践の特徴として、以下の3点が挙げられます。1つ目は、様々な教科についてのUDLを実践することで、どの教科でも実践可能であることを明確にした点です。2つ目は、異なる教科担任と一緒に授業を検討することで、多様な専門家の視点からの授業づくりの利点を示しました点です。3つ目は、ICTを用いることで学力や興味・関心の差が大きい中学校においてもUDLの実践は十分可能であることを示した点だと思います。

(東北福祉大学 教授 黄 淵熙先生)